

(4) 南信地域における物質文化の一例

—糸切鋏と沢蟹をめぐる習俗—

両角 太一

1 はじめに

考古学が主に扱う遺物・遺構といった静的なものから、それが生活の一部を形成していた当時の動的な状態に迫ろうとするならば、人間行動と物質との関係が同時に観察できる現在に目を向け、解釈の基準を作成することが必要となる。すなわちミドルレンジ・セオリーの研究においては、必ずしも他国の狩猟採集民に限ったことではなく、我々の身近にある日常に目を向けることも示唆に富む手がかりを与えうるのではないだろうか。

ここでは疫病祓いや魔除けの習俗における糸切鋏と沢蟹を例に人とモノの関わりについて検討し、考古学の視点も含めて若干の考察を行いたい。

2 瘡の虫

2-1 瘡の虫切り

「瘡^{かん}」とは、ささいなことでいらだつ性質や、ひきつけといった発作的な疾患など、主に神経性の小児病全般を指す。一般に子供の夜泣きがひどいときなどに「瘡の虫が強い」と言われ、こうした場合に虫を切って弱めるのがよいと信じられてきた。特定の神仏に願掛けをしたり、各地域や家々によって独自の療法が試みられたりしている。この「虫封じ」や「瘡の虫切り」といわれる習俗の一事例を取り上げ、物に対する伝統的な認識を掘り起こそうとするのがここでの目的である。

2-2 虫病

瘡の虫というように体調変化や心理的異常の原因を体内の「虫」に求める考え方（虫因説）は、近代以前の医学では広く浸透していたようである。その代表例とされる「応声虫」は、中国宋代の医書に奇妙な姿をした獣として描かれ、日本では鎌倉時代に入り、その思想がもたらされたという（長谷川ほか2012）。国内では、こうした奇虫の存在に対して懐疑的な医家も少なくなかったようであるが、顕微鏡観察という近代的な手法を取り入れた高玄竜による医書『虫鑑』（1809）にお



図1 虫倉神社の位置（地理院地図より作成）

いて、患者の体分泌物や排泄物を検体として、「発驚」（瘧^{けいれん}）、「瘡風」（癩^{らいふう}病、ハンセン病）、「瘡」（皮膚病や筋肉の外傷）、「瘰」（腫物）などを虫がもたらす症例として取り上げ、その観察図には寄生虫などを写實的に表現しているものもあれば、架空の獣や昆虫のように表現された虫も示されている。長谷川ほか（2012）はこれを、虫因説という既存の概念に強く影響されていたことで、観察結果に虚像を結び、かえって従来のパラダイムを補強することになったと評価している。さらに、「虫病」がもたらす「勞瘵^{ろうさい}」（結核性の病氣）は、それ以前には「鬼」がもたらすとする「伝戸病」（「勞瘵」の旧称）であったことなどを例に、「鬼」という霊因が、次第に姿・形のある生き物の「虫」へと変化してきたと指摘している（長谷川ほか2018）。

排便^{かいぎょう}に蛔虫や蛭虫が混じることは戦後しばらくまで一般的に見られたようであり、虫因説は、民衆にも自然と理解されうるものであったことがうかがわれる。近代以前、医家の間で虫が引き起こすと考えられていた疾患は、個人以上に共同体全



図2 虫倉神社と山浦地域（北東から）



図3 虫倉神社参道



図4 「水神明王」碑石

体の問題と考えられていた側面がある。そうした意味で「虫」は社会が作り出してきたともいえるが、日本には古くから死者の悪霊である「鬼」が疫病や災厄をもたらすという病因観が現実の問題としてあった。こうした虫や鬼に対して民間ではどのように向き合い対処してきたのかについて以下で考えていく。

3 山浦地域の虫倉祭り

3-1 柏原集落と虫倉講

現在まで地区行事として疳の虫切りの講が行われている柏原地区の虫倉講について取り上げる。茅野市柏原地区（旧柏原村）は、蓼科山の麓、茅野市から長和町へと至る大門街道（国道152号線）の入口にある集落で、かつては宿場村であった（図1）。現在は毎年6月14日に虫倉神社（図1・2）への代参と、公民館へ幼児をもつ母親やその祖母が集って行者による護摩供養が行われている。虫倉講は柏原を中心に近郷の集落の人々によってつくられた講で江戸後期から明治初期にかけて設立したとされる。かつては虫倉神社の前に幼児を連れた婦人が集まって護摩を焚いていたようで、かなりにぎやかだったようである（茅野市編1988）。この機会であったのかは分からないが、虫倉神社参詣の折に祠の前へ鉋か鎌などを置いて

くるといふ風習が知られている。

3-2 2022年の事例

虫倉講は、近年、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、虫倉神社への代参のみを行っている。ここでは、2022年に行われた虫倉講について報告する。

早朝、講員は公民館を出発し、途中、田んぼの脇の水神様の石碑に御幣などを供えてから、白樺湖へと至る大門街道（国道152号線）を登っていく。最後のSカーブを抜けると右手に「虫倉神社参道入口」書いた看板が見える。ここから山へと入り、虫倉神社を目指す。この一帯は「ヤマノカミ」と呼ばれている。虫倉神社の参道には霊神碑や御嶽講関係の石造物40体（碑石32、石祠5、姿像3）が配置されており、これらの石造物を目印に道先案内人と呼ばれる先達と、区長や副区長を含む講員が急斜度な尾根を直線的に登っていく（図3）。先達はこれを務める家の者が代々継承してきており、神霊碑はこの先達の死後や、生前自己の靈魂の安住の地を信仰の地に求め、死後のよりしろとして建てられたものがあるという（柏原遺跡保存会1995）。虫倉神社へ至る道中、再び「水神明王」や「水神」などと刻まれた碑石に御幣を捧げていく（図4）。水神の石碑は、用水が枯れ

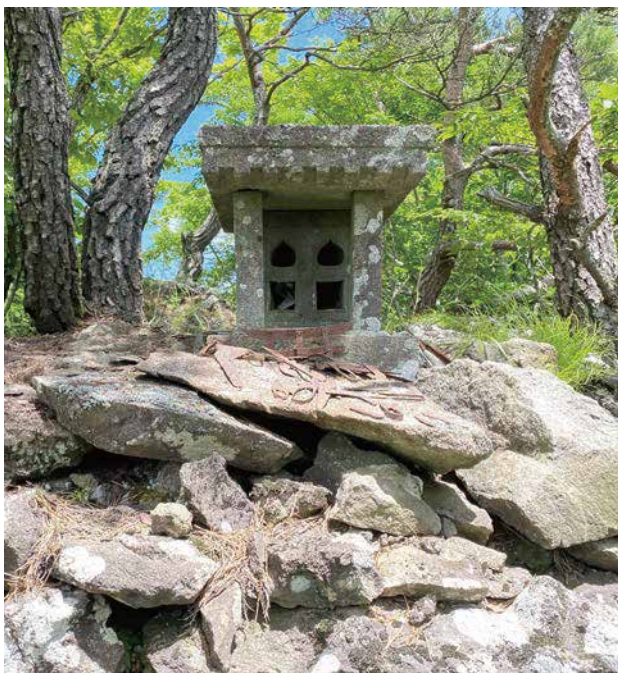


図5 虫倉神社本殿の石祠（正面）と鉄製品の分布状況図

ずに米が豊かに稔ることを願って建てられたといわれている。付近を流れる小川には今でもサンショウウオが生息し、清らかな水が保たれている。

参道入口から約1時間、身の危険を感じる難所を超えると虫倉神社へと到着する。虫倉神社(1525m)は尾根に張り出した巨岩上にあり、参道入口からの標高差は約200mである(図5)。ここからは大泉山・小泉山をはじめとした山浦地域を眺望することができ、石祠もこの方向に据えられている。虫倉神社へ到着すると御神酒と御幣を供えて、先達による木遣り歌が奉納される。虫倉神社から八子ヶ峰公園へ向かってさらに進むと張り出した岩場の上に奥の院と呼ばれる石祠が据えられている。ここでも先達による木遣りが唄われた。ここで代参は終了し、講員は帰路につくことになる。

3-3 虫倉神社の鉄製品

ところで虫倉神社の祠には聞き及んでいる糸切鋏や鎌の他、これまで記述や話に聞くことがなかった剣形、菱形を呈する鉄製品が数多く見られたことは新たな発見であった。しかし、糸切鋏を含むこれらの鉄製品がいつ、だれが、何の目的で残していったものなのか、詳細な記述や伝承は既になく、これらが考古学的な調査対象物としての性格を有していることが分かった。以降、数度の調査を行い、虫倉神社の鉄製品の平面図を作成した(図5)。長年風雨にさらされたせいか劣化が激しいものや、落下しているものが多数あったがこれらは図化することができなかった。その内容について、以下に述べておきたい。菱形の鉄製品は最も多くみられ、長さは10cm前後で形態的なバリエーションが見られる。表面には整形のために敲いた痕跡があり、そのため縁辺はやや波打っている。中には、末端が意図的に折り曲げられたものが含まれている。これら菱形鉄製品の実用性は希薄であり、剣形の模造かと思われる。また、他の鉄製品よりも風化が進んでおり、埋没しているものも多いことから古い様相を示している。

次に多くみられるのは糸切鋏(和鋏)で、剣形とは対照的に実用的である。また、剣形とは異な



図6 鎮大神社の虫封じ(上伊那郡辰野町沢底)

り、祠の前に分布が集中している。この糸切鋏の下には大振りの鎌一本が配置されている。鎌は小型の模造品もあり、またブリキ製のものが一点、近くの松の枝に引っ掛けられていた。

柏原の虫倉神社へ疋の虫切りに鋏や鎌を奉納することは知られているが、虫倉講ではこれら鉄製品の奉納は行われておらず、実際にはいつ、誰がこれを置いていったのかについては分からなくなっている。虫倉講に限らず、子供の夜泣きがひどいときに母親が我が子をおぶって密かに参詣するとか、願いが叶えばお礼参りに鋏を置いてくるなどと伝えられている。講員の中には2歳の頃、実際に母親におぶわれて一緒に山を登った経験をもつ者もいた。

上伊那郡辰野町沢底の鎮大神社では、子供の誕生に際して紙に鋏の絵と共に生年月日、名前、「虫封じ祈願」などを書いた紙を境内の建板に貼り付ける風習が現在でも行われている(図6)。鋏が記号的な絵標示となっている点が特徴的である。総社である長野市中条の虫倉神社においても鋏を用いた虫封じ信仰はみられないことから、鋏に霊性をみる考えは虫倉信仰とは別の経緯で発生してきた可能性がある。

3-4 エーヨー節にみる虫倉講

山浦地域では、民謡のエーヨー節を明治期までは草取りや畑仕事、盆踊りなど、所かまわずよく歌っていたようである。この中に虫倉講について歌ったものがあるので引用する(茅野市編1988)。

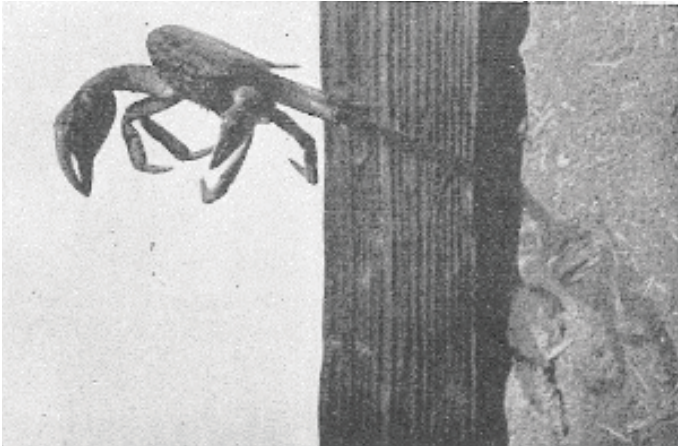


図7 長和町古町の沢蟹呪物（武田1943より転載）



図8 「かに」の標示物（長野県茅野市湖東堀）

- ① へ俺も行ったや虫倉山へ 帰り土産にゃキンタン花や
- ② へ二十四日にゃ坊やをつれて 護摩の煙に逢いに来い
- ③ へ願ひ上げます虫倉様へ 坊やの虫の切れるよに
- ④ へ虫も起きずにぼちゃぼちゃ育ち お礼詣りにゃ二人づれ

いずれの歌も人々の虫倉講への期待と子供の健康を願う気持ちが感じられるものである。②の24日は柏原の祭日と異なるが、虫倉参道の碑石の一つ「三笠山 刀利天宮」の碑石には、「明治三十七年六月二十四日 守矢与左エ門外六名」とあり、話し手の集落では24日に虫倉講があったのかもしれない。石造の碑文は柏原地区の他に、「湯川講中」「芹ヶ沢講中」「中村講中」「北大塩講中」「埴原田講中」とあり、少なくともこの5地区には虫倉神社に関係した講があったことを示している。④の「お礼詣りにゃ二人づれ」にみる二人とは、母親とその子供のことをさしているのだろうか。また、こうしたお礼詣りに銚子を置いていくとした話もあるが、銚子の奉納が虫封じに際して行われるのと、虫封じの事後に行われるのとでは意味合いが大きく異なってくるように思う。前者の場合、銚子は祀神との交渉、贈与的な性格を持ち、銚子は何らかの形で子供の虫封じに寄与する可能性があるが、事後の場合、銚子は、祀神への感謝と、今後の継続な関係を保つこと、あるいは銚子供養といった意味合いをもつという違いがあるので

はないだろうか。実際にどちらが多かったのか分からないが、調査方法によって何らかの違いが見いだせるかもしれない。いずれの場合にしても子供の成長を祈願するという場合に、単なる道具としてではなく、人と人ならざるものを取り次ぐものとしての銚子に霊性を見ているのではないだろうか。

4 鬼やらいと沢蟹

4-1 蟹の年取り

もうひとつ、魔除けについて非常に気になっている風習があるので取り上げたい。それは、1月6日に沢蟹を串に刺して戸口に飾る「蟹の年取り」である。

武田久吉『農村の年中行事』（1943）では長和町古町の蟹の年取り行事についてこのように説明している（図7）。「六日に七草の準備の草を採りに行くついでに沢蟹を沢山捕って来、それに茅又は竹の串を尻から刺し、炙って赤くなったのを、神棚を始め便所の外口等に挿すのである。裏木戸へも、また縁側の外へも、茅葺の家なら至る所の出入口の軒端に挿す。余った蟹は熬ってその夕の年取りの肴とする。蟹が得られなかった場合には、半紙にその絵を書いて間に合わせることもあり、絵のかわりにカニと文字で書いてそれぞれの場所に貼る家もある」。七草と一緒に沢蟹を採集していたことが分かる事例で、示された写真から、大きな銚子をもった沢蟹が正面を向けて掲げられていたことが分かる。

山浦の民俗に詳しい湯田坂正一は、著書『続

やまうら風土記』(2004)の中で蟹の年取りにおける沢蟹の意義について次のように説明している。「蟹は固い甲羅と鋭い爪、それに大きな鋏を持つ頑強な姿態や、二つの鋏を挙げ何ごとかを祈る仕種が悪魔から人々を守り、無病息災を祈ってくれるものと信じられてきた。また蟹という字は“虫”を“解く”と書き、豊作を祈る農民の思いがこめられているのではないだろうか。」

蟹の年取りの事例は、茅野市でも数例見られたのでここに紹介したい。

- ① 祖母が1月6日に「かに」と書いた紙を茅に挟んで戸口へ飾っているのを見たことがある。(茅野市柏原・昭和19年生まれ)
- ② 子供が習字に行く次いでに紙に「かに」と書いてきてもらい戸口に貼った。先代がやっていたので続けているが、意味はわからない。(茅野市湖東堀・2021年聞き取り)
- ③ 実家の玉川では紙に「加荷」と書いて戸口へ貼っていた。荷を加えると書き、財産や収穫が増えることを願った。(茅野市湖東中村・2021年聞き取り)

現在まで行っていたのは事例②であるが、その意味は伝承されていなかった(図8)。柱に一辺10cm程度に切った和紙に「かに」と書いて貼ってある。図5の写真と同様に本来は土壁と柱の隙間に刺していたのかもしれない。事例①、③のように現在、7・80代の方が子供のころにやっていたのを見たことがあるといった話が多く、戦後はこの習俗が伝承されていないことが多い。①の事例は、「かに」の標示化に串の要素を残しており、蟹の串刺しと、「かに」と書いた紙のみを貼るものとの中間的な形態となっていたのは興味深い。

沢蟹呪物の文字化標示は沢蟹が捕れなかった場合には古くから行われていたようであるが、文字化標示の転換や、蟹の年取り習俗の消滅は、戦後の農薬普及によって沢蟹が身近に見られなくなったことや、呪的な害虫払いの必要性がなくなったことが関係しているようである。

下伊那地域では蟹の年取り行事と同じことを節

分に行っている。また、武田(1943)によると、菅江真澄の「いほの春秋」天明4年(1784)のなかで今の塩尻市の小正月にこの行事が行われていたことが記されているという。このように、沢蟹を串に刺して戸口にさしたり、紙に蟹の絵や「かに」などと書いて出入口に貼ったりする風習は、六日正月に限らず、小正月や節分にも行われており、本来はどの行事の風習であるのか分からなくなってしまっている。しかし、疫病祓いや豊穰祈願の行事で行われていることはいずれも共通している。

4-2 沢蟹とイワシ

節分行事に鰯の頭を串刺しにして戸口へ飾る風習はよく知られているが、沢蟹の串刺しとはどういった関係になっているのだろうか。沢蟹(「かに」標示を含む)と鰯を用いた呪物の地域的な広がりを検討するため、先の茅野市の事例に加え、主に長野県史民俗編をもとに分布図(図9)を作成した(註1)。事例は両者含めて224例、このうち沢蟹の事例は62例である。図をみると鰯は県内ほぼ全域に分布しているのに対して沢蟹は、一部塩尻にもみられるが、ほぼ東信、南信地域に限られていることが分かる。また、県南部でも木曽谷では沢蟹の事例は報告されていない。ひとつ山を越えた地域では行われていないことに注目される。沢蟹を用いる事例は、伊那谷から諏訪、山浦、佐久、上田方面と続いており、この分布圏について櫻井秀雄氏から「古東山道」のルートや、かつてあったとされる「諏訪国」との関係も考慮する必要があるのではないかと指摘があった。この行事が古代にまで遡るかはわからないが、古くより開かれていた道とこれによる婚姻関係などの社会的な紐帯が沢蟹を用いた焼きかがしの文化的な波及を促した可能性はある。

分布の密度に関しては調査者や文献調査でのバイアスを考慮する必要があるが、特に下伊那地域では「かに ひいらぎ」「蟹 柊」などと書いた紙を貼る家が多くみられる。またこれら「かに」標示とは別に柊を戸外へ飾る事例や、一本の串に鰯と柊がセットで取り付けられる場合もあること

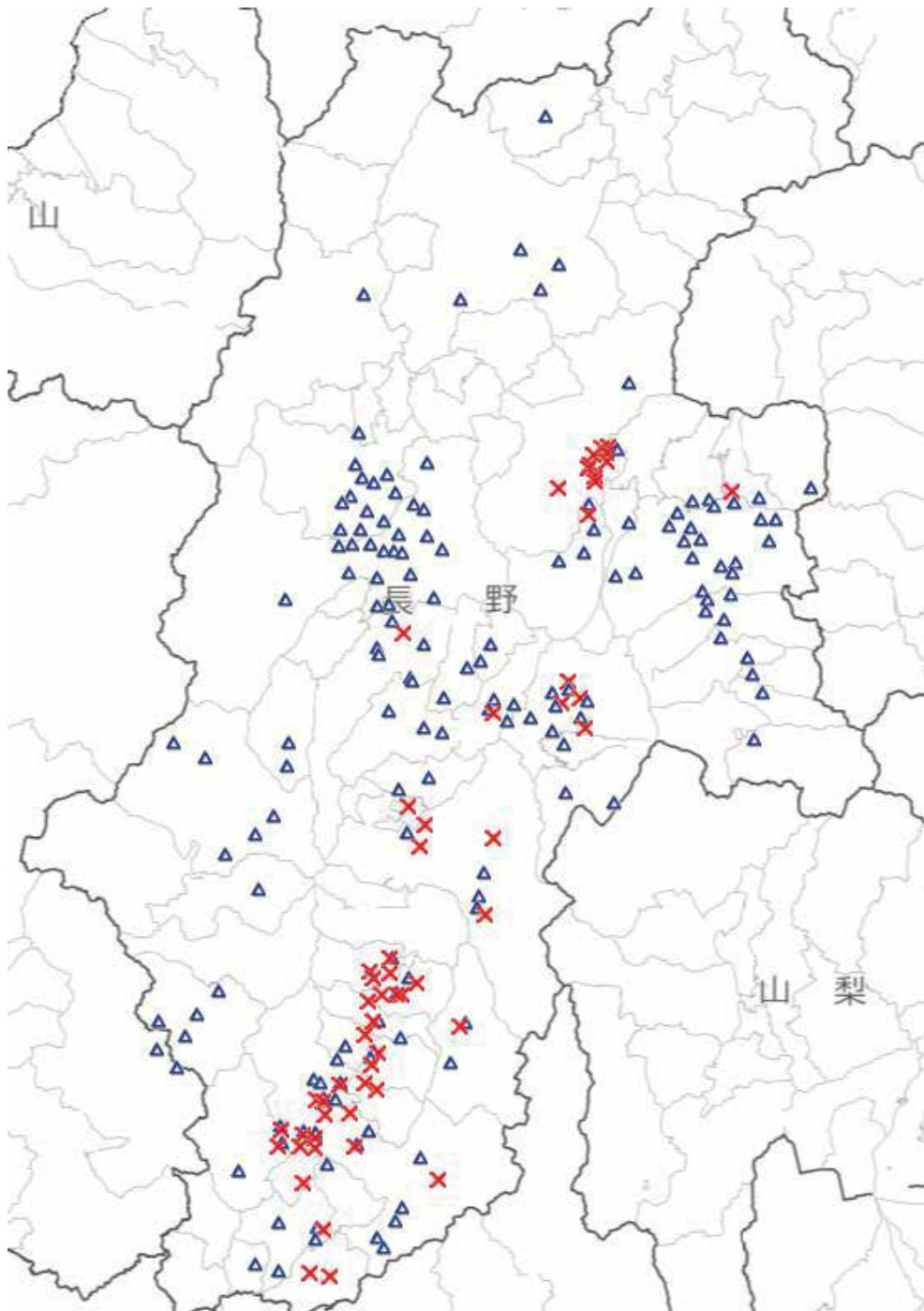


図9 長野県における沢蟹とイワシの分布（地理院地図より作成）
イワシは「△」、沢蟹は「×」で表記した。なお、六日正月・節分等を含む。

から、下伊那地域では「かに ひいらぎ」の事例は、本来沢蟹と柊をセットで用いていた可能性があり、「かに」の標示化が進んだことで、柊と別々で飾られるようになり、蟹は疫病神除け、柊は虫払いというようにその意味も分化していったのかもしれない。

蟹ではないものの、この古いかたちが用いられていた事例が、長野県最南端の阿南町新野の節分

行事の調査で報告されているので引用する（長野県1988）。「12、13cmの竹串ににほしの頭と青木を刺したオニを作って出入りする戸口全部にさす。さして歩くことをオニヤライという。オニはオニノクビ、ヤッカグシともいう」

この事例は、串刺しにした標示物の呼び名や、その行事の名称まで伝承されていた、筆者の知る限りでは唯一の事例である。この話者は、魚や柊



図10 三重県神島の蘇民将来（森1988より転載）

を串刺しにした呪物を「オニ（鬼）」「オニノクビ（鬼の首）」と呼んでおり、また「ヤッカグシ」としても知られていたようである。ヤッカグシは、鰯の頭を串にさした呪物を「焼きかがし」や「ヤイカガシ」と呼ぶことから同義の名称と思われる。そして、これらが「鬼やらい」するために用いられていたことも述べられている。鬼やらい（追儺）は、一般に節分行事で行う豆まきとして知られているが、日本では慶雲3年（706）の疫病流行に際して、陰陽道の行事として中国からとりいれられ、その年の晦日に土牛を作って鬼やらいをしたことにはじまるという（大塚民俗学会編1972）。

阿南町新野の事例は、この鬼やらいの古い伝統を民間に取り入れた形を示しているとすれば沢蟹を用いた「焼きかがし」も、本来は「鬼」や「鬼の首」を模していたものであって、単なる悪霊防除の臭気物ではなかったことになる。

興味深い事例として、森浩一の『考古学随想』表紙に三重県神島の民家の玄関に飾られた貴重な蘇民将来の写真がある（図10）。蘇民将来符を注連縄飾りに括り付け、その上に顔を描いた蟹（アシナガガニ）の甲羅を取り付けている。蟹の甲羅の突出部を上にもってきて、荒々しい形相の顔が描かれている。かつて、蘇民将来に蟹を用いる風習は、東海地方に広くあったようである。蘇民将来の伝統と焼きかがしに直接の関係はないかもし

れないが、この場合も新野の事例と同じく、鬼的な辟邪のイメージに蟹を用いて表現している点で共通している。

沢蟹を用いた焼きかがし成立の背景には、蟹になんらかの呪力を求める考え方や思想があったのかもしれない。蟹にまつわる伝説や民話（註2）、考古資料などから、その系統関係をまず調べる必要がある。

4-3 蟹の考古学的事例

蟹が儀礼的な場に登場してきた古い証拠は、弥生時代中期（前1～2世紀頃）に求められる。

兵庫県灘区桜ヶ丘や鳥取県東伯郡柏村出土の流水文銅鐸（外縁付鈕1式）に見られる同じ鋳型から製作された鐸胴部の狩猟農耕図には、鹿の群れに弓を引く人物の足元に蟹の姿が表現されている（図11、右図上面）。イモリや亀、カエルといった淡水に生息する生物と共に描かれていることからこれは沢蟹とみてよいだろう。しかも、沢蟹だけ他の水棲動物とは別個に描かれていることは注目される。春成秀爾は銅鐸絵画の解釈学的研究において、「銅鐸絵画は、神話の世界を描いたものであり、そしておそらく同時に、祭儀の実際を描いたものであろう。」と述べている（春成1990）。

もしそうであるならば、弥生文化の伝播に伴って沢蟹が農耕儀礼の場や神話的な世界観に何らかの形で登場してきた可能性がある。少なくとも水田技術の定着に伴って沢蟹を含む水棲生物が民衆の暮らしの一風景を織りなしてきたことは容易に想像できる。

一事例であるが沢蟹に関連した考古資料について紹介した。今後、地域や時期・時代別にも蟹の関連資料を収集し、思想的な背景を考えていく必要があるだろう。

5 おわりに

本稿では、疫病祓いや魔除けの習俗に関して、鋏と沢蟹を例にその物質文化を検討した。加えて、その発生と展開について若干の考古学的検討も試みた。この取り組みの可能性として、民俗を物の視点からアプローチすることで、考古資料の解釈に新たな枠組を提供し、逆に、考古学の文化

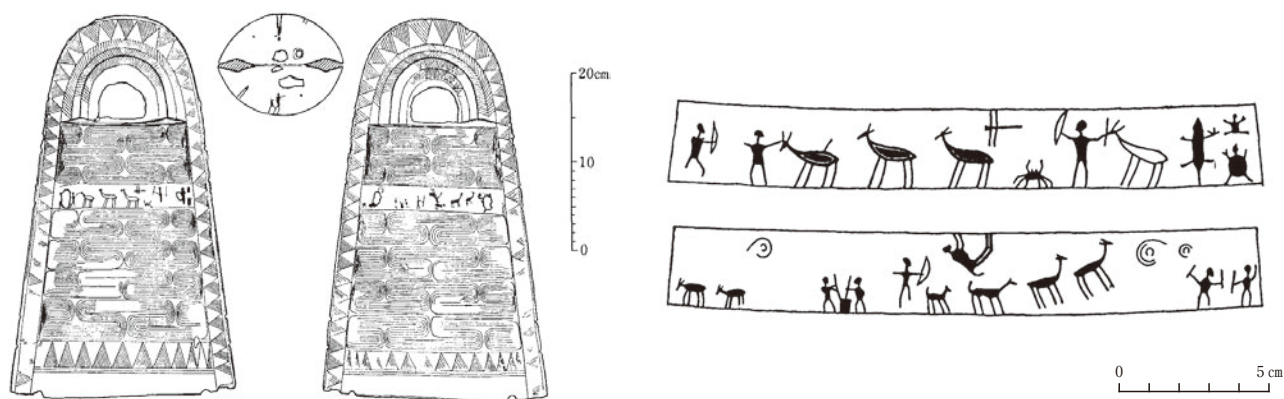


図11 左：兵庫・桜ヶ丘1号銅鐸、右：同範5鐸の絵画復元図（引用元は註3を参照）

理論へ再考を促すことで（例えば物の地域性と方言との構造的な関連など）、物にまつわる現象の体系的な理解へつながることが期待される。

謝辞

本稿を執筆にあたって、川崎保氏、櫻井秀雄氏には民俗事例や祭祀研究における多くのご教示をいただき、また飯田支所での研究環境や地域の皆様のご協力がこの取り組みを後押ししてくれました。大学の友人や先生には文献提供などにご協力いただきました。改めて感謝の意を表します。

註

- 1) 図9の図作成に用いた文献を以下に示す。
『長野県史民俗編』全巻、上伊那誌編集会 1980『長野県上伊那誌 民俗編』、茅野市編 1988『茅野市史下巻 現代・民俗』、丸子町誌編集委員会 1992『丸子町誌 民俗編』、野本 2018
- 2) 蟹と人との異類婚姻譚は少なくない（白田 1980、赤坂 2017）。
- 3) 左図は梅原（1953）原図・佐原（1979）修正図、右図は三木（1969）原図を春成秀爾（1990）が改変した図を引用した。なお、梅原末治（1953）による鳥取・泊銅鐸の絵画実測図には蟹の鉗の形まで描かれている。

参考文献

- 赤坂憲雄 2017『性食考』 岩波書店
白田甚五郎 1980『民族文学へのいざなひ—鳥と蟹とをめぐって—』 桜楓社
梅原末治 1953「一群の同範鑄造の絵画について」『上代文化』24、1-12頁
大塚民俗学会編 1972『日本民俗事典』 弘文堂
柏原遺跡保存会 1995『柏原の石造文化財』 柏原区
佐原眞 1979『銅鐸』 日本の原始美術7、講談社

- 長谷川雅雄・辻本裕成・ベトロクネヒト・美濃部重克 2012『「腹の虫」の研究』 名古屋大学出版会
長谷川雅雄・辻本裕成・ベトロクネヒト 2018「「鬼」のもたらす病—中国および日本の古医学における病因観とその意義—（上）」 南山大学紀要『アカデミア』16、1-28頁
武田久吉 1943『農村の年中行事』 龍星閣
茅野市編 1988『茅野市史 下巻』 茅野市
長野県 1988『長野県史 民俗編』2（2） 南信地方、長野県史刊行会
野本寛一 2018「生きものの民俗再考—サワガニ・ヒキガエルを事例として—」『伊那民俗研究』25、2-30頁
春成秀爾 1990「男と女の闘い—銅鐸絵画の一齣—」『国立歴史民俗博物館研究報告』25、1-30頁
三木文雄 1969「銅鐸」『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈』 兵庫県埋蔵文化財調査報告書1、77-158頁
森 浩一 1988『考古学随想 考えたり怒ったり』 社会思想社
湯田坂正一 2004『続 やまうら風土記』 長野日報社